

新和泉図書館建設計画の足跡

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 折戸, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16260

新和泉図書館建設計画の足跡

折戸 晶子*

2012年5月に開館した和泉図書館の建設計画は、実に10年を要した。開館に至るまでの学内状況の経緯は別稿「和泉キャンパス新図書館建設の決定まで」¹、建設計画の詳細は別稿「新和泉図書館の設計における取り組み」²をご参照いただくこととし、本稿では、図書館における検討内容について述べることにする。

1 新図書館建設検討体制

大学内での公式な会議体として、和泉キャンパス新図書館建設委員会（以下「建設委員会」）が設置されたのは、2008年4月1日であるが、それに先立ち、同年1月に当時の和泉図書館グループ（現在の組織名では、和泉図書館事務室）では、菊池亮一グループリーダー（現在は図書館総務事務長）を先頭に建設を推進する方策を練っていた。当時の和泉図書館グループは、専任職員が6名であり、ロードマップグループに3名、体制検討ワーキン

*おりと・あきこ／明治大学 学術・社会連携部 図書館総務事務室

¹菊池亮一「和泉キャンパス新図書館建設の決定まで」（図書の譜 第17号）

²馬渡誠治、軍司均、田中義之、山崎敏幸「新和泉図書館の設計における取り組み」（図書の譜 第17号）

グループに3名というグループ分けで検討した。

ロードマップグループでは、工事の進め方として、当時学内で考えられていた分割工事ではなく、一括工事を推進する根拠を模索した。そこで工事期間を想定し、その間の代替施設のあり方、さらに新図書館サービスまでも検討し、最終的に一括工事を可能とする計画案を打ち出した。一方、体制検討ワーキンググループでは、建設計画のプロセスにおいて、企画段階、概要設計段階、詳細設計段階、実施設計段階、施工段階と段階を追いながら、それぞれの時期で検討すべき事項を洗い出し、時系列でやるべきことを明確にした。加えて、推進・検討体制について委員会体制をとることを提案している。このときの提案資料によると、委員会組織として、基本構想検討部会（仮称）、設計検討部会（仮称）、図書館専門部会（仮称）、運営サービスWG（仮称）、設備WG（仮称）、そのほか必要に応じて設置するWGと書かれている。

第1回建設委員会では、ロードマップグループ及び体制検討ワーキンググループによってまとめられた資料をもとに、今後の推進体制について協議されている。その結果、建設委員会の下に、基本コンセプト専門部会、図書館専門部会、施設設備専門部会が設置されたのである。基本コンセプト専門部会は基本コンセプトの策定を、図書館専門部会は図書館の運営管理全般について、その機能を実現するための諸事項を検討、施設設備専門部会は新図書館の外観などについて検討する役割を担った。特に図書館専門部会は、図書館に最も密接に関わりを持つ部会として重要な位置づけにあった。

2008年度は、建設委員会のもとに設置された基本コンセプト専門部会において、基本コンセプトがまとめられた。ここでまとめられた基本コンセプトは、2005年度にまとめられた「新和泉図書館建設に関する要望－和泉キャンパスにふさわしい『知の拠点』の構築を目指して－」（以下「要望」）を基礎にしたものであり、終始この基本コンセプトに基づき設計が進められた。

同じく建設委員会のもとに設置された図書館専門部会では、はじめに図書館が検討・確定すべき事項とそのスケジュールを確認している。この時筆者は事務局を担っていたが、図書館建設は初めての経験で全てが手探り

の状態であった。2000年に開館した中央図書館建設を経験した諸先輩方、同僚たちの話を聞いたり、残されていた膨大な資料を確認したりして、日々奮闘していたことを思い出す。

2008年度に基本コンセプトがまとめられ、2009年度には設計業者を選定する時期にきていた。このとき、業者選定をプロポーザル方式で選定している。プロポーザル方式による業者選定では、設計者の創造性・技術力・経験などを審査し、業務内容に最も適した設計者を選定することができる。さらに具体的な設計については、発注者と設計者の共同作業で進めることができるという特徴がある。新和泉図書館は、当初から和泉キャンパスの象徴的な施設となりうる質の高い建築設計を求めており、図書館の機能を設計に十分反映するためには、図書館が設計段階に関与できる環境が重要であると考えていた。プロポーザル方式での業者選定は、これを可能にするものであった。この方式で業者を選定することは本学では初めてのことであり、プロポーザル方式の採用には困難があったが、施設課の担当職員の粘り強い説明により建設委員会での承認を得ることができ、理事会もこれを承認した。こうして設計業者が株式会社松田平田設計に決定し、いよいよ具体的な設計に入ることとなったのである。この方式で業者が選定されたことにより、竣工するまでの期間全てに亘り、図書館が設計検討に参加することができた。

図書館では、まず、同社がプロポーザルで提案した設計案（プロポーザル時には社名が伏せられており、D社設計提案となっている）に対して、D案見直し検討WGを作り、問題点をまとめ、2009年6月から開催された設計定例（以後第46回2010年6月23日まで、及び臨時回同年7月14日、8月23日）時に話し合った。この設計定例には、設計業者、施設課・調達課のほか、図書館からも代表メンバーが出席しているが、本学では設計定例に運用担当部署からメンバーが出席することはかつてないことであった。このことは図書館にとっては非常に重要な意味を持つことであり、この和泉図書館建設計画が成功した秘訣ともいえよう。設計定例の報告及び検討事項は、図書館専門部会に伝えられ、そこで出た意見要望は、次回の設計定例に反映できるよう体制を組んだ。さらに、図書館専門部会のもとに各種WGを設置した。同年7月に代替施設運用WG（のちに代替施設運用・

蔵書計画 WG と改称)、9月に利用サービス WG、10月に情報関連 WG、2010年1月に備品・サイン計画 WG を開始している。

図書館専門部会及びこれら WG では、設計定例から図書館へ投げかけられた検討依頼事項に答えるという役割もあった。設計側への回答は至急を要することが多く、図書館専門部会及び WG メンバーは深い議論でありながら短時間で結論を出すことを常に要求されていた。こういった経験は我々図書館員にはあまりない経験であったため、最初は戸惑うことが多かった。

さて、基本設計、実施設計と進捗し、工事期間に移っていくと、建築定例会議(第1回2010年9月22日から第70回2012年2月29日まで)が開催された。ここでも図書館員3名が出席している。さらに建築定例会議の下に工事担当範囲に基づく各分科会が設置され、詳細な打合せが行われた。図書館員が関わった分科会は、DS・ICT分科会(2010年11月2日～2011年4月19日)、家具備品工事分科会(2010年11月9日～2011年3月8日)、サイン分科会(2011年5月23日～2012年1月30日)、書架・家具備品定例会議(2011年6月1日～2011年12月21日)、情報設備工事定例会(2011年9月7日～2012年1月25日)であった。各分科会で設計を確定するにあたり、図書館各 WG に意見を求めている。そのため、図書館各 WG の役割は重要であった。

2 建物の形状

設計定例が開始されてまもなく重大な課題に突き当たった。それは、図書館の外観形状に関する問題であった。設計定例では、はじめに設計と条件を整理し、大学が想定する敷地面積を基に、建物全体のゾーニングと動線計画を検討した。設計者は、くの字に屈曲した敷地面積に対して、設計と条件を網羅できるように設計案を繰り返し出してきたが、2009年9月9日のA案から同年9月30日のG案まで検討を重ねたにも関わらず、残念ながら図書館として納得いくものには至らなかった。提案が採用されなかった理由としては、敷地の形状に問題があったことが大きいと思われる。図書館が考える理想像として、書架は連続し途中で分断されることがない配置となっていて、各分野の蔵書の増減にも容易に対応できるようにしてお

きたいということがある。旧和泉図書館では、後に詳細を記しているが、書架エリアが複数個所に分かれていたため、蔵書配架に様々な制限が課せられていた。新図書館では、そのような制限は極力避けた設計を強く望んでいたのである。くの字の敷地では、書架の流れが途中で切れてしまったり、階段の位置が限定されてしまい、諸室を希望どおりの形状にできなかったり、あるいは配置ができなかったりなど多々問題があった。

ちょうどこの頃、施設課と設計者が建設工事全体を検討する中で、キャンパス全体における建物の位置、高さ、工事工程、コストなどの面から、敷地形状の再検討が必要となってきた。

以下、当時問題となっていた点である。

- 京王井の頭線、桜の木の根の現場状況より、プロポーザル案より第三校舎前の中庭側に建物位置が寄ってきている。そのため、第三校舎前の中庭が狭くなることで圧迫感、閉塞感を一段と大きく与えることになる。
- 当初旧図書館の正門寄りの一部分を工事期間の代替施設として残し、そこから奥に新図書館を建設する計画であった。そのため1階面積を確保するためには、第三校舎中庭側に面積を広げざるを得ず、キャンパスの空間が狭くなっていく。また、図書館全体の面積を確保するためには、高層階になることから、キャンパス空間の問題だけでなく、利用勝手が良くない。
- 旧図書館敷地面積以外に工事範囲が及ぶことから遺跡調査面積が多くなり、場合によっては費用と工期が余分にかかる恐れがある。
- 旧図書館の一部を工事期間中代替施設として利用することは、工事騒音や振動による不便を図書館利用者に負担させることになる。
- 旧図書館の解体が新図書館建設前と後とで2回に亘ることから工期と費用がかかる。

以上の問題点を解決するため、第三校舎前の広場を大きく確保できるような建物配置、自由な発想で柔軟な設計プランができるような平面形状、代替施設のあり方、建物位置について再検討した。そこで考え出されたのが旧図書館を一括解体し、その跡地に新図書館を矩形で建設することであった。これにより上記の問題点の多くが解決できることが期待された。その

ためにはまず、工事期間中の代替施設を全く別のところに置くことを考える必要があった。当時、第四校舎は学生の体育系サークルの練習施設であり、隣接地のゴルフ練習場は授業でも使っていた。これとは別に、グラウンド側にあった体育更衣棟が老朽化していることから、以前から建て替えを要望されていた。これに着目し、この体育更衣棟に練習施設及びゴルフ練習場を包含した新しい体育更衣棟を建設する計画を立案し、関係部署の了解のもと、第四校舎及びその隣接地を図書館代替施設として使用できるように提案した。こうして、学内の関係部署と折衝を持ちながら、最終的に理事会で第四校舎とその隣接地に仮設建物を設置することが承認された。なお、この体育更衣棟の建設費は、新和泉図書館建設の一環として新和泉図書館建設費から予算消化されている。

こうして代替施設の問題が解消したことから、新図書館建設の設計プランは2009年10月7日のH案で直線形となり、同年12月24日のR案まで、設計者、施設課職員、図書館職員の3者でとことん議論を積み重ね、徐々に良いプランを確立していった。

なお、新図書館建設の舞台裏に、代替施設への移転と新図書館への移転について工夫と苦勞があったことは否めない。そのことについては、別稿「和泉図書館の移転記録－2回の大規模移転を終えて－」³を参照されたい。

3 図書館での検討体制

ここで、各WGが担当した検討内容について触れておくこととする。

●代替施設・蔵書計画WG

代替施設への移転計画

代替施設から新図書館への移転計画・実施

代替施設のサービス体制

3キャンパス図書館蔵書計画

書架・書庫・集密書架検討

貴重書庫（和泉図書館での導入について）

³ 畑野蘭子「和泉図書館の移転記録－2回の大規模移転を終えて－」（図書のパラダイム 第17号）

和泉図書館の蔵書のあり方検討

雑誌保存および配架方法検討

文庫、新書、英語リーダー、地図等の収集方法検討

利用者を引き付ける蔵書計画

●利用サービス WG

総合インフォメーション

閲覧サービス（図書・雑誌・特殊コレクション、貸出、返却、予約、配送）

蔵書サービス（開架、電動書庫）

レファレンスサービス

各カウンターサービス

図書館リテラシー（情報リテラシー・授業連携・図書館活用法・ゼミガイダンス・学生誘引・読書促進）

留学生・外国人教員サービス

研究者サービス

コミュニケーション機能

諸室運用（グループ閲覧室、共同閲覧室、ホール、新聞閲覧、研究者個室など）

広報

AV 資料運用

ギャラリー運用

セキュリティ

社会連携（生涯学習支援サービス）

高大連携

そのほか利用サービスに関わること

●情報関連 WG

情報ネットワーク／MIND 関係

情報設備計画

電子資料サービス

機器配置計画（業務用端末、OPAC 専用機、自動貸出機、オープンプリンタ）

ノート PC 貸出運用

●備品・サイン計画 WG

内装（天井・壁・床）

什器（機器備品・照明・掲示板）

サイン計画

多言語案内サービス

4 図書館での検討内容

次に、各 WG が検討した主な事項について述べたい。

(1) 蔵書計画

蔵書計画は図書館の基本的かつ重要な要素であり、今後の図書館の計画の中で適切な蔵書数を割り出すためには十分な検討が必要である。当初、2005 年度にまとめられた要望、続いて 2008 年度に策定された基本コンセプトにおいては、蔵書収容冊数を 80 万冊と提示していた。今回の建設は既存の図書館の建て替えであり、当時和泉図書館の蔵書数は 34 万冊であったが、将来的に 80 万冊までの蔵書を収容する必要があるのか、図書館内でも意見が分かるところであった。また、和泉図書館に限定した蔵書計画ではなく、明治大学図書館全体の蔵書の観点から考えるようにした。その結果、近い将来、現在狭隘化している中央図書館の蔵書の一部を和泉図書館に配架することも念頭におきながら、今後の除籍についても考慮し、60 万冊収容可能な蔵書計画とした。

代替施設・蔵書計画 WG では、蔵書コンセプトとして、「手にしたくなる蔵書」を掲げ、和泉キャンパスのニーズに合わせた蔵書構築を目指すとしている。

配架計画については、これまでの和泉図書館の配架方法を引き継ぐのか、あるいは新たに考え直すのかを議論した。旧図書館では、開架書架エリアが 4 か所に分かれていた。参考図書は一箇所に配架されていたが、一般図書については、第 1 閲覧室に 3、6 類を、第 2 閲覧室に 2、8、9 類及び大型図書、第 3 閲覧室に 0、1、4、5、7 類及び新書文庫を配架していた。各分野の蔵書数や利用頻度を考慮し、各閲覧室の広さに収まるように配架してあったが、非常にわかりにくい状況であった。そこで、今回の計画にあたり、

分野ごとにエリアを区切った配架ではなく、0類から順に配架することをはじめに考えた。さらに、今回の設計で取り入れられた積層集密書庫は、地上にあり、しかも開架エリアとフロアが続いているという大胆な発想で作られたことを生かし、同一主題の開架図書と書庫本を極力同一エリア階に配架する計画とした。

さらに、配架方針として新たに取り入れたものは表紙を見せる配架である。図書館の配架は背表紙を面に見せて左から右へ順序良く並べることが常識である。これを表紙を表に見せて並べようという試みである。背表紙だけが見えていて窮屈に並んでいる本より、面積の広い表紙をゆったりと見せられたほうが人の目には印象深く映ることが期待できる。

また、一般図書エリアとは別に、その時々に応じた図書を集めてNDCに拘らない配架で利用者が手に取りたい蔵書を増やそうと計画した。これらを実現するために、備品計画と連携し、書架に工夫をしたことは言うまでもない。これについては、内装・備品計画のところで言及する。

雑誌については、旧図書館では、カレント雑誌は雑誌架にタイトルのアルファベット順に配架し、バックナンバーなどの製本雑誌は書庫に請求記号順に配架していた。カレント雑誌の配架は、基本的にはタイトルのアルファベット順ではあるが、大型雑誌は下段にしか置けないB5サイズを中心とした雑誌架であったため、配架順序が一連の流れにならずあちこちに行き、わかりにくかった。バックナンバーのうち固定登録の製本雑誌には請求記号が付与されているため、分類番号に応じて、順序良く並ぶのだが、簿外登録の雑誌には分類番号に応じた請求記号がなかった。そのため、それらはタイトルのアルファベット順に並んだ。雑誌架に配架したカレント雑誌と書庫に配架したバックナンバーの製本雑誌が同じ並びではないため、その両方を探す場合に混乱をきたした。当時の雑誌書庫には、利用者のために配架対照表が貼られてあったが、利用者には不親切な配架方式であった。これらを解消するため、簿外登録の雑誌の請求記号の体系を見直し、これにも分類番号に応じた請求記号を付与することとした。これにより、カレント雑誌と製本雑誌の配架順序が同一となった。さらに、雑誌架でのカレント雑誌の並び方が雑誌を探しにくくしていることに着目し、利用者が探しやすいように雑誌を配架できるようにするための備品を備品計画と

連携して検討した。書架棚のサイズに合わせた配架ではなく、利用者にとってわかりやすい（これは管理もしやすい結果を生む）配架を基準として、そこに書架の仕様を合わせるという方法を貫いた。

このような検討を行った代替施設・蔵書計画 WG では、蔵書計画案を実に 25 回も改訂しながら議論を重ねたのである。

(2) 利用サービス計画

旧和泉図書館では、施設面からみて新しいサービスの展開に限界があった。今回の建設を機に、施設面からのサービスの制限を解消するとともに、中央図書館における課題を踏まえて諸室の追加要件も検討し、サービスの実現に反映した。

基本コンセプトに基づいて設計された図面に記された諸室やエリア約 90 箇所について、利用サービス WG では、設置の目的、利用サービス内容及びその運用方法を検討した。ここでは、主な箇所について簡単に触れることとし、一つ一つについて述べることは紙面の都合上割愛させていただくが、議論を重ねた結果は、完成した新和泉図書館の様々なところに反映されている。

○音の問題

最も大きな課題として、音の問題が挙げられる。図書館は元来静かな場所であるとされてきた。しかしながら、現在の大学教育では、グループ学習が取り入れられているため、討論できる場所が必要であった。討論するということは声を出すということであり、一人で静かに学習するスタイルも従来どおり必要とされる中で、相反する要求に応える必要があった。また、学生同士、ちょっとしたおしゃべりもしがちであり、図書館内を全て静寂に保つためには、管理側で取り締まりを強化するなど、決して利用者にとって居心地の良いものではないという課題を抱えていた。これを受けて設計側では音のゾーニングを設計に反映することを検討していた。音のゾーニングに具体性を持たせるため、利用サービス WG では、各室の活動イメージをまとめ、討論する場、多少のおしゃべりができる場、パソコンを使える場、声もパソコンの音も出さない静かな場所といっ

た音の度合いを明確にした。

○飲み物

館内では食事はもちろんのこと、飲み物も禁止とすることが通例であった。しかし、中央図書館建設時に、全面的に禁止するのではなく、飲み物を飲める場所を設けたことが評価されていたことから、新和泉図書館でも同様に考えていた。しかしながら、昨今の利用者の動向の変化に加え、東日本大震災の夏の節電対策による冷房の設定温度の規制に伴う水分補給対策をきっかけに、席にいながらちょっと飲み物を口に含むことは滞在型図書館としてあっても良いのではないかという意見が出始めた。議論を重ねた結果、蓋つきの飲み物であれば、閲覧席でも飲むことができるようにした。

○ホール

講演会や研修会を開催できる場所として、備えるべき機器について検討した。パソコンを使ったプレゼン設備、ネットワークの整備、スクリーンのサイズを検討した。また、学内及び学外への貸出運用についても検討した。

○サロン

入館ゲートの外に設けたサロン内に併設されたカフェは、大学側との調整に時間を要し、サロンそのものの運用についても様々な議論がなされた。サロンは、業者による販売が入る想定以前から、図書館内に飲食可能な場所を設けようということと設置された場所なので、利用サービスWGでは、飲食物の持ち込み可とすることを計画したが、結果的にカフェ業者との契約において営業中の持ち込みは実現しなかった。また、学生団体の発表の場として、サロン内でのイベント開催も可能とする計画案もまとめた。

○デジタルサイネージと掲示板

新和泉図書館はガラスを多用し壁が少ないため、掲示板をほとんど設けることができなかった。それを逆手にして設計側から提案のあったデジタルサイネージの採用を検討した。デジタルサイネージという新しい試みに対して、図書館での掲示物を全て洗い出し、掲示目的、掲示期間、掲示内容及び掲示サイズについて確認し、デジタルサイネージに表示す

る内容を計画した。そして、それぞれの内容についてどの場所に表示させることが効果的かについても議論を重ねた。

○ギャラリー

中央図書館・生田図書館にはギャラリーがあるが、旧和泉図書館にはギャラリーはなかった。新しくギャラリーを設置するにあたり、ギャラリーでの展示方針として、中央図書館のように図書館所蔵資料の展示ができること、生田図書館のように映像や音声などのコンテンツを展示可能とすることとした。

○コミュニケーションラウンジ

学生たちがいつでも自由に話し合える空間として、またイベントを開催するなど柔軟なコミュニケーションエリアとなるように運用する。

○グループ閲覧室と共同閲覧室

旧和泉図書館にはグループ閲覧室が2室あったが、足りなくて困るほどではなかった。和泉の学生には必要性がそれほどないのかと思われたが、中央図書館・生田図書館では利用頻度が高く、他大学図書館見学からも必要性はあるものと認識していた。そこで良く使われている図書館では学生がどのような使い方をしているのか調査し、情報関連WGと協力し、電子黒板を使ったプレゼン設備を取り入れたグループ閲覧室とすることとした。グループ閲覧室の利用受付・予約には、オンライン予約システムを導入し、貸出カウンターでの鍵のやり取りをなくすという計画とした。また、各部屋の収容人数や室数についても検討を重ねた。

一方、共同閲覧室は、中央図書館の経験から、非常に騒がしい場所になることがわかっており、当初はこの室を作らない計画であった。ところが、建設委員会でも設置の強い要望があり、これを作ることが決まっていた。そのため、中央図書館で問題となっている複数のグループ間で生じる声に対する苦情を解決する策を講じなければならなかった。そこで、他の閲覧室への音漏れ防止を十分考慮した設計とすること、ホワイトボードを準備し学習に使用できるだけでなく、複数のグループ間を仕切ることができるようにすることとした。

○研究者用個室

和泉キャンパスには他キャンパス所属の教員や非常勤講師が多く、授業

の合間には教員は講師控室にいるしかなかった。これらの教員や大学院生が利用できるよう研究者用個室を設置することとした。この個室もグループ閲覧室と同様にオンライン予約システムを導入する計画とした。

○図書館リテラシー教育

和泉図書館では、図書館リテラシー教育に力を入れており、ゼミガイダンスは旧図書館のころから教員からの要望が多かった。旧図書館のゼミガイダンスは、1室をアコーディオンカーテンで仕切った2室で実施していた。これは音が隣室へ筒抜けのため、授業としては決して良い環境ではなかった。ゼミガイダンスも年々要望が増えており、新図書館では独立した室として3つの情報リテラシー室を設けている。情報リテラシー室の運用については、情報関連WGと協同で検討を重ねている。

検討初期には、情報リテラシー室は可動式の仕切りボードにより室のサイズも柔軟に変更可能とする計画であった。しかし、設計側から可動式間仕切りでは確実な遮音は望めないという話があり、音への配慮を優先し、それぞれを独立した室として仕切った。そして、ゼミガイダンスの実績やゼミ授業の履修人数を調査し、3種類の収容人数とすることを設計側に提示した。

○新聞の閲覧

利用サービスWGでは、旧和泉図書館でも設置していたように新聞閲覧台を設置するということは至極当然のように考えていた。その一方で設計図面から新聞コーナーの面積が大きくとれないことも課題としてあり、この閲覧台が大きく面積を取っていることに頭を悩ませていた。そのような折、他の図書館を見学する中で、閲覧台を設置しない方法もあるのだと知った。新図書館では新聞や企画ものを配架するエリアには軽快さを取り入れたいと考えていたことから、新聞閲覧台を設けない形の閲覧コーナーを作る試みをする事とした。このコーナーには、ソファやベンチのような椅子を設け、利用者は好きな席で新聞を読むことができるスタイルを考えた。利用サービスWGでは、このようなスタイルでは、新聞がなくなるケースが多発するのではないかと懸念される意見もあったが、新聞コーナーをカウンター前方に設置することで持ち出しの抑制になるだろうと考え、計画を進めた。

○特設コーナーの企画運用

新着図書や書評本、教員等の推薦図書を、案内板などのメッセージを添えて配架する。旬の配架を心がけ、利用者に新たな本との出会いの場を提供する。このような企画ものの配架には、書架にも一工夫がほしいと設計側にも要望した。1階フロアには参考図書が配架されており、貸出できる図書が少ないこともあり、入館ゲート付近に手に取りたくなる本、読みたくなる本を配架し、学生の本離れを少しでも回避していく計画を考えた。

○貸出カウンターの高さ

当初利用サービス WG では、既存の図書館でもそうであるように、カウンターは座って対応するもの、と思い込んでいた。しかし、他の図書館の見学でハイカウンターを採用しているところを見かけることが多々ある。利用者と目線の高さを合わせることで相互の隔たりを低くし、不快感をなくしているようであるという見解から、和泉図書館からカウンターの高さを見直すという考え方が出された。これを受け、利用サービス WG でもカウンターのあり方を再検討してみることになった。カウンターでの対応は、利用者に良くも悪くも影響を与えるものであり、カウンターの高さ変更という新たな試みについては他の WG から注目されていた。なお、利用サービス WG では、ハイカウンターを採用することを決定した後も、執務者のことを考慮し、立ち作業を軽減するためにもハイチェアを採用するよう要望した。

○返却ポストの運用

旧図書館では、開館時間中も入口外に返却ポストを常設していた。この運用に対して、設計定例では、備品としての設置ではなく、建物に返却ポスト口を設置し、ポストそのものは内部に設置する計画を考えていた。しかしながら、今回の設計では、入口周辺はガラス張りとなっていることから、入口付近にはそのような返却ポスト口を設置することができなかった。コンクリート壁面は入口から少し外れて、第三校舎側に回り込む場所にしかなかった。管理側からみた場合、返却ポストの返却図書を事務室に運ぶ動線は、利用者の動線を横切るものであった。そこで、設計定例では和泉図書館と話し合い、運用として、開館中の返却は、基本的

には貸出カウンターにできるよう利用者に案内し、返却のトラブルを減らすとともに返却ポストへの返却冊数をできるだけ減らそうと考えた。

(3) 情報関連計画

情報関連全般については情報関連 WG で検討・計画した。情報機器を導入するうえでのコンセプトを次の通りまとめた。

○新しい情報サービスの導入

「有線から無線へ、固定端末からモバイルへ」

既存の中央・生田図書館の概念、施設、システムにとらわれず検討し、新しい図書館に新しいサービスを導入する考えである。その結果、新規導入サービスは和泉図書館だけでなく、中央・生田図書館でも共有することを念頭に入れシステムを設計する。活動的な図書館である新和泉図書館にふさわしいシステムを導入する考えである。

導入システムとして、シンクライアント、無線 LAN ネットワーク、貸出ノート PC、OPAC モバイル端末、web 予約システム、PC 利用状況表示システム、電子ブックリーダを検討した。

○利用者に魅力のある情報サービスの導入

「快適と安全が両立したネットワーク、システムを」

つながるだけではなく利用に耐えうる速度のネットワークと個人情報の保護、ウイルス対策がなされた安全なネットワークを提供する。ただし機器の管理、保守が現場の負担にならないようなシステムでなければ継続は難しい。新入生も手軽に手を伸ばすことのできる、やさしい、敷居の低いサービスの提供も模索する。

システム環境として、シンクライアント、無線 LAN、認証システム、タッチパネル OPAC、プレゼン設備の充実を整える。

○図書館としての情報サービスの導入

「最終目標は全ての図書館サービスをオンライン化」

図書館でしか提供できない情報サービスは何かという視点を常に持って検討する。和泉キャンパスメディア棟との機能重複を避けつつ、和泉キャンパス全体での情報サービスという点では連携も視野にいれる。

図書館独自のサービスを展開する場として、情報リテラシー演習室、データベース専用機、OPAC 端末の充実、利用者端末からのレファレンスがあり、ここでの情報サービスを検討した。

○技術の発展に対応できる柔軟なシステムとインフラの導入

「5年後10年後はどうなっているか？」

情報技術の進歩は早い。将来の機器増設、運用変更にも柔軟に対応できるシステムとインフラを提供する。

インフラ設備として、全フロアのOAフロア化（床下空調）、高速有線LAN、フロアスイッチ、シンクライアント、無線LAN、高スペックサーバ、サーバールームの整備を行う。

○安定した図書館情報サービスの提供

「全てのユーザに開かれたシステムを」

安定稼働している既存の機器も導入していく。また新しいシステムに対応できないユーザにも手を差し伸べる。ただし、コストには限りがあるので必要最小限にとどめる。

具体的には、固定のOPAC、自動貸出機、インフォメーションボード、モバイル情報コンセントを設置する。

(4) 内装・備品計画

備品・サイン計画WGでは、家具備品工事分科会と連携しながら、まず初めに館内の内観を構成する要素についてコンセプトを検討した。内部空間を作り上げる要素には、床、天井、壁面といった施設面だけでなく、家具・備品、サインがある。これら全てが総合的に影響することから、初期の段階の同じスタートラインから検討を進めることとした。全ての要素は統一感が取れて調和するように、色調、素材、形状を考慮することを基本的な考え方として最初に挙げている。そして、音のゾーニングに呼応するような空間づくりを重要視した。

特に、大きな面積を占める閲覧席について、多くの議論を費やした。どこにどのような閲覧席を置くかを検討するにあたり最初に行ったのは、図書館内の空間の特性を客観的に把握することであった。空間特性を静⇔動を縦軸に、個人⇔コミュニケーションを横軸にしたマトリクスで表現し、諸室

をこのマトリクスの中に、つまり、静・個人／静・コミュニケーション／動・個人／動・コミュニケーションの4つの特性にあてはめた。その上で、閲覧席の形状の特徴をそれぞれの空間特性マトリクスに入れ込んだ。

備品・サイン計画WGでは、このマトリクスを使って、空間イメージを膨らませ、共通理解を作り上げていったが、その議論はかなり深く行った。なぜなら、イメージは人によって様々であり、言葉で表現しても話し手と受け手で異なるイメージを持つこともあり、間違ったイメージを設計者に伝えることのないようにするためであった。イメージを表現した言葉を辞書で調べ、備品・サイン計画WGメンバーの認識を確認したり、写真や実物の具体例でお互い確認したりした。閲覧席だけでなく、各エリア、諸室の全ての内装・備品イメージについても検討し、検討した数は700個を超えている。これら1つ1つを設計者と共有しながら採用の有無を検討した。

家具備品工事分科会からの具体的な備品設計図が出される度に、それら1点1点について、空間特性に合っているか、利用勝手は大丈夫か、運用に適しているかなど多方面から十分検討した。その中でも閲覧席には相当の時間を費やして検討した。閲覧机・椅子の形状はもちろんのこと、隣や前の席との間のパーティションの高さ、机上面端部からの出っ張り加減、パーティションの形状、パーティションのフィルムの透過性など、細部に至るまで考えた。

備品・サイン計画WGでは、フロア空間イメージと備品配置について「活気から静寂へ」をテーマに、図書館内の備品配置をまとめた。基本的に各フロア内では、メディア棟側から第三校舎側、そして桜並木側へ進むにつれて動から静へ推移する。同時に立面での流れも加え、図書館全体の空間を計画した。1階の活動的なエリアから2階へ上がると、2階はコミュニケーションラウンジ側を起点として第三校舎側の閲覧席から桜並木側の閲覧席へと移っていく。2階桜並木側閲覧席と3階のメディア棟側の閲覧席に同等のイメージを持たせ、3階も第三校舎側から桜並木側へと移るにつれて静の空間に移っていく。4階もフロア内は基本の変化をしていくが、4階メディア棟側の閲覧席は3階第三校舎側の閲覧席と同等のイメージとし、4階第三校舎側の閲覧席は3階桜並木側と同等のイメージとする。2階と3階、3階と4階に同等の空間イメージを置くことによって、各フロアが分断されず、

水の中に絵の具が溶け込んでいくように全体が繋がってひとつの空間を作り上げていくようなイメージで空間構成をまとめられた。

備品・サイン計画 WG の検討内容をもとに家具備品工事分科会で備品の設計がまとめられ、さらに詳細な備品製作のため、書架・家具備品定例会議において備品工事施工業者の設計図をチェックする段階へと進んだ。この会議には、備品・サイン計画 WG 代表メンバーが出席し、設計者、施工者、調達課職員と直接話し合い計画実現に向けて進んでいった。

ここで、閲覧席と書架について、その特徴を簡単に触れておきたい。

○閲覧席

旧和泉図書館の閲覧席は、大半が大型テーブルで構成されており、個人席はあまり多くは設置していなかった。大型テーブルの閲覧席では、大抵の利用者は隣の席に荷物を置いたり、隣り合わせで座ることを好まないため1席空けて座ったりする状況が見られ、座席利用が非効率であった。そこで、新和泉図書館の閲覧席は個人のスペースを明確にし、一人が複数席を占有しないように、そして隣り合わせでも座りやすい環境を作る工夫を設計に取り入れることにした。

検討の結果、大型机は一部に留め、ほとんどの席に前後両隣の境目にパーテーションを設置し、個人席という形にすることにしたのである。しかし、単に四角い机にパーテーションを設置したような形では面白くない。そこで設計者からの提案をもとに、動から静への空間構成に応じた閲覧席を配置することを検討した。丸みを帯びた曲線を使うことで柔らかく親しみやすい形状から動をイメージさせ、直線を使い硬さを加えることで落ち着きと緊張感を持たせた形状から静をイメージさせるようにした。さらに、左右の囲いの形状を広々と開放的にしたのから包み込むような形状で落ち着き感を持たせたもので動と静を表現した。また、天板の厚みは強度の関係から 40mm で全て統一したが、軽快なエリアには重みのあるイメージになりすぎるため、テーパーをかけて（奥から手前に行くに従って傾斜をつけて断面を次第に細くする）目に映る端部の断面を 10mm とした。こうして、いくつかの要素の組み合わせにより、閲覧席は大きく分けて 6 種類設計した。

このほか、各階の壁面や窓際にカウンター席を設けているが、これらカウンター席についても、静の空間では雁行型にパーテーションを設置し、個室感を持たせるようにした。

○閲覧椅子

閲覧椅子についても閲覧席と同様、動から静の空間を構成するための重要な要素となりうる備品である。そこで、素材について、座面の布地の有無、脚部にステンレスを使ったものと木材で仕上げたものを取り合わせ、形状については座面に円形のもとと四角形のを、背面を逆三角形で軽快に仕上げたものから四角形にしたものを取り合わせて設計したのである。

このほか館内には、コミュニケーションエリアにヒトデ型チェア、マーブルチョコのような円形チェア、鼓のような形のスツールを置き、利用者が楽しくなるような備品を取り入れた。書架側面にはバタフライスツールを置き、本の森で一休みするようなイメージを作った。そして、静の空間には、リラックスチェアやホテルのラウンジにあるようなソファを用意し、勉強で疲れた神経を癒したり、ゆったりと読書を楽しめるように考えた。

○書架

書架は棚板が重量に耐えうる強度をもち、耐久性に優れ、板面が滑り過ぎない塗装であるという基本的なポイントは当然のこととして、今回導入した要素には、地震の揺れによる図書の落下を防止できる機能を持たせている。一般書架については、設計定例において、図書館から、棚板に傾斜を設けることを提案した。これは「IAAL ニュースレター」（大学図書館支援機構、2012, no.8 及び no.10）で紹介されていた書籍落下防止用書架金具からヒントを得たものである。今回導入した書架では、棚板に4度の傾斜を持たせることで、図書の落下を防ぐ設計となっている。また、棚板は、設置の際、背面側にロックがかかる設計となっているため、棚板そのものの落下もしない設計となっている。さらに、床下20cmに土台を埋め込み、書架そのものが揺れによって転倒しない構造となっている。これについては、設計定例では、モックアップを使って、過去に発生した大きな地震のうち6つの地震波による耐震実験を行い、問題

がないことを確認した。

通常時の利用についても一工夫されている。それは、本を表紙を見せる配架ができるように置き換えることができるというものである。棚板には5cm程度の背板が付いている仕様となっており、棚板を取り外し、背板を手前にし、斜めに置くことができる。このとき、通常背板となっている部分が、本の受け板になるというものである。

次に、雑誌書架だが、旧図書館で雑誌架による配架で混乱を感じていたことから、これを解消する備品を検討していたところ、見学先の事例を参考に設計者から提案された書架は非常に面白いものであった。一般書架を使い、棚板の上にスタンドタイプのアクリル板を置き、そこに表紙を表にしてカレント雑誌を配架するという方法である。これで、1段に3、4冊の雑誌が配架できる。さらにそれぞれの雑誌の下段には、未製本のバックナンバーを積上げ方式で置けるようにし、雑誌間には間仕切り板を設置した。しかも、そのバックナンバーの棚板は引き出しのようにスライドできるようにし、バックナンバーを探しやすいようにしたのである。こうして、雑誌の大きさに関わらず、順序よく配架することを可能とし、カレント雑誌とバックナンバーの位置関係も容易にわかるようにしたのである。

書架について、もう一つ記しておきたい。それは、特設コーナーに設置した書架である。ここには、読書推進となるような教員推薦図書、図書館員のお勧め本、学生が選書した図書など様々な企画によって図書を配架する計画だが、一風変わった形の書架を取り入れ、「ここには何が置いてあるの?」と興味をそそるような設計とした。本の置き方は自由自在、本の紹介文をマグネットボードに貼ったりできるような掲示板も設けている。

(5) サイン計画

サイン計画は、備品・サイン計画WGが検討したが、図書館におけるサインについて書かれた文献を読むところから始めた。そして、全体的な方針として次の点をポイントとして掲げた。

- 利用者動線に基づくサインを適所に配置

- 全体配置を素早く把握できる案内図
- 書架案内は OPAC と連動した言葉を使用
- 方向案内サイン（方向矢印、大きなサイン）を配置
- サインもトータルデザインの一つの要素とし、経年後も自前のサインを貼ることはしない

サインには、場所ごとに配置案内、利用案内、注意喚起案内、短期的な情報掲示などのサインがある。利用者の目線に従い、これまでの図書館運営で過不足があった点も考慮し、必要なサインを全ての箇所について洗い出した。最初に挙げた点数は 343 点であった。これについて、具体的な設置場所、数量、取り付け方法、素材についても話し合い、その結果を設計者に資料として提示している。また、それらサインを分類し、サインの表示内容を記した一覧表を作成した。これに基づき検討を進める中で、採用したもの、採用しなかったもののチェックも加え、検討経緯も併せて記録するようにした。

このサイン一覧表に基づき、平面図にサインの位置が記されると、備品・サイン計画 WG でそれを確認した。そして、サインの位置と内容が確定すると、設計側で具体的なサイン製作を進める体制としてサイン分科会が開催されるようになった。ここにも備品・サイン計画 WG から代表メンバーが出席し、直接設計者及び施行者と検討を繰り返した。

サイン分科会では具体的なサインの製作にあたり、サインデザインイメージを具体例に基づき検討した。色、サイズ、文字フォント、図柄、設置方法、立体感などあらゆる視点で意見交換を行った。これら意見交換から 2011 年 9 月 26 日のサイン分科会で次の点を確認した。

- サイン計画の考え方：図書館が楽しくなるサインデザイン
- デザインコンセプト：Book Mark
- フロアカラーの設定

サインは利用者の目に留まってこそ意味を成す。そうかと言って、トータルデザインを壊すような不快なものでは良くない。目立つようにしながら目立ちすぎないようにし、必要に応じて自然と目に入ってくるような心地よいサインとし、全体的に一貫性があり、意味を持たせたサインにする。こういった点を念頭に置き、サインの設計コンセプトを次のようにまとめ

た。

- 動から静の変化にあわせたフロアカラーを設定
- 室名は、紙を二つに折り曲げたイメージで、文字サイズを利用頻度に応じて大中小に分類
- フロア案内のサインは、当該フロアを本やノートの角を折り曲げるようなイメージで、ブックマークとして表示
- 階数表示サインは、階の数字を切り込んで、フロアカラーの色紙を下地にして紙を重ねたイメージで立体感をもたせる
- 利用案内のサインも、角を折り曲げてブックマークをあしらったデザインとする
- ピクトサインは、心が弾むようなデザインとする
- 衝突防止サインは、本をあしらったデザインとする
- NDC 分類のサインは、本そのものの立体的な形とし、表紙に分類を表示する
- 館名サイン、カウンター名サインは、箱文字で立体的に表示する

このほか、外構サインとして、「図書館」という言葉を 40 言語で表現しデザインした。40 の言語は、2011 年度時点の本学留学生の出身国と協定校の公用語 44 言語から同一表記を除いた 39 言語に日本語を加えた数である。デザインの特徴として、文字サイズについて、普段目にするのが少ない少数言語を大きく表示し、言語に対する興味を持ってもらえればという願いを込めるとともに、本学と国際社会との「架け橋（リエゾン）」を通じて、和泉図書館が世界に開かれていることを表現している。

(6) デジタルサイネージ

サイン計画として、固定サインのほかデジタルサイネージを導入した。館内には、普遍的なサインと可変的なサイン、緊急的に短期間掲示が必要なサインなどがあると考えた。普遍的なサインは固定サインとして設置するが、可変性のあるものや緊急時に一時的に必要なものについては、美観を損ねず、インパクトのあるサインとした。色々な図書館でありがちな状況だが、開館後にあらゆる場所に紙の掲示サインをしている例が多い。備品・サイン計画 WG では、後追いで貼られる紙の掲示サインは一切しな

い方針で計画をしていた。このような方針に沿うものとして、デジタルサイネージが有力候補として挙がってきた。

デジタルサイネージは、本学では導入事例がなく、また他大学図書館でも事例が少なかったため、どのようなことが可能になるのか、全く予測不能であった。そこで、具体的な導入の検討について、運用面の検討を利用サービス WG で、情報環境面の検討を情報関連 WG で進めることとした。利用サービス WG では、あらゆる状況を想定して、どの場所にどういったサインが必要になるのか洗い出し、デジタルサイネージでの見せ方を検討した。これに情報関連 WG で各所における表示方法や情報環境を施工業者とともに整えていった。

検討の段階で、デジタルサイネージを使って効果的な案内を表示するために、一方的に見せるサインではなく、利用者参加型のサインを取り入れ、利用者を引きつけようと考えた。その例のひとつとして、ディスプレイにタッチパネル機能を加えることにより、利用者自身に欲しい情報を選択させることにした。さらに動画を導入し、魅力的な見せ方ができるようにした。

5 おわりに

新和泉図書館の建設が具体的に進み始めた頃、2001年3月に開館した中央図書館建設計画に携わったある先輩から言われたことがあった。中央図書館とは異なり、お金も時間もない。だから多くを望みすぎるな、優先順位を明確にし、そぎ落とす部分はそぎ落とし、重要なものだけに焦点を絞って計画するように。そして、中央図書館建設計画の時のような十分な検討時間はないのだから、図書館内の検討体制はスリムにしなさい、と。

建築経費については、図書館では把握できない領域であるが、施設課・調達課の担当者は相当苦勞されていた。予算内で収めなければならないという厳しさの中で、我々図書館員と同じ思いで学生に本当に喜んでもらいたいという熱い情熱を持って計画を遂行してくださった。その奔走ぶりには本当に頭が下がる思いである。

図書館内の検討体制については、先のアドバイスはあったものの、図書館員のほぼ全員がこの計画に携わっている。これは、今回の計画の筆頭と

もなるような立場であった菊池図書館総務事務長の強い意向からであった。このため、かつてないスピード感と緊張感で図書館員の検討が行われることとなった。このことが図書館と施設課・調達課、設計者との連帯感を生み、信頼性、互いを尊重する気持ちを作ったのである。このようなチームワークのあり方が今回の設計を成功に導いたと確信している。

最後に、この新和泉図書館建築計画において、図書館の要望に耳を傾け、細部に亘り検討くださった設計関係者、学内の調整及び設計関係者との調整に尽力くださった施設課菅氏、岩田氏、調達課葛和氏、森氏をはじめ、関係する全ての方々に深く感謝の意を表したい。